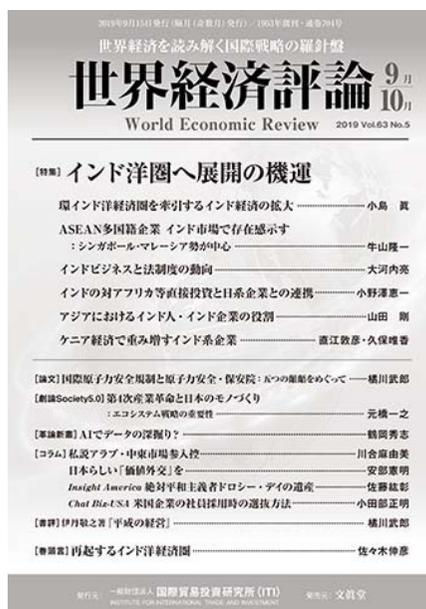


本論文は

世界経済評論 2019年9/10月号

(2019年9月発行)

掲載の記事です



世界経済評論

定期購読のご案内

年間購読料

1,320円×6冊=7,920円

6,600円

税込

17%

送料無料

OFF



定期購読
期間中

富士山マガジンサービス限定特典

※通巻682号以降

デジタル版バックナンバー 読み放題!!



世界経済評論 定期購読



0120-223-223

[24時間・年中無休]

お支払い方法

Webでお申込みの場合はクレジットカード・銀行振込・コンビニ払いからお選びいただけます。
お電話でお申込みの場合は銀行振込・コンビニ払いのみとなります。

Fujisan.co.jp
雑誌のオンライン書店

平成の経営

東京理科大学大学院経営学研究科教授 橘川 武郎



[著者] 伊丹敬之 (いたみ ひろゆき)

国際大学学長、一橋大学名誉教授

[発行] 日本経済新聞出版社、2019年1月

[判型] 四六判・タテ組、304ページ

[定価] 1800円＋税

日本企業にとって、平成という時代は何だったのか。わが国を代表する経営学者が波乱万丈の30年間を活写した好著である。

平成の時代に日本企業は、2度の試練にさらされた。1991（平成3）年のバブル崩壊に始まり98年の金融崩壊まで続いた「大きな長い疾風」と、「壁を真っ逆さまに落ちる」ような危機感をともなった2008年のリーマンショックとが、それである。それらが日本企業に大打撃を与えたことを指摘する点では、類書との違いはそれほど大きくはない。

本書の最大の特徴は、2011年の東日本大震災以降、「日本企業が、地力をより強くして戻ってきた」ことを強調する点にある。根拠として挙げるのは、2010年代に顕在化した実質

労働生産性・売上営業利益率・自己資本比率・ROE（自己資本利益率）の継続的上昇、完全失業率の継続的低下などの諸事実であり、これらをふまえて日本企業は「シャキッとシ」という評価を導く。筆者は「私の楽観の根拠を書きつらねた本になったのかもしれない」と本書を締めくくっているが、この楽観論こそ、本書のユニークさであり、最大の魅力だと言える。

もちろん日本企業が復活の道を歩み始めたとはいえ、手を拱いているだけでは、真の再生は実現しない。カギを握るのは、身の丈を適度に超える高い目標を掲げ「あえて積極的な戦略をとる」こと、つまり、「オーバーエクステンション戦略」にもとづいてきちんと投資を行うことである。その投資の眼目は、国内を固めながらの海外への事業展開にある。「国内なくして海外なし、海外なくして国内なし」の観点に立って、中心部（国内）が空洞化するドーナツ型ではなく、中心部を充実させたうえでのピザ型のグローバリゼーションを推進すべきだというのが、筆者の主張である。

本書は、GDPに対する対外投資残高や輸出の比率を国際比較したうえで、「海外直接投資と輸出の両方を合わせたグローバリゼーションの総合では、日本は米中独のどこよりも低い」と指摘する。そして、「まだまだ日本企業の国際展開には、大きな余地がある」と述べ、平成の時代における日系企業の海外現地法人（現法）の売上急伸に注目する。あわせて、「平成がはじまった頃は圧倒的なアメリカ依存だったものが、平成が終わる頃には現法売上ではアメリカ、中国、アセアンがほぼ拮抗する三者鼎立のパターンとな」と、日系企業の進出先の変化にも言及する。

全体として、教えられることが多い、良書である。

(きっかわ たけお)